

## 平成 30 年度第 3 回立川市総合教育会議 議事録

開催日時 平成 31 年 1 月 10 日（木曜日） 15 時 33 分～16 時 41 分

開催場所 立川市役所 302 会議室

出席者 [構成員] 清水庄平（市長）、小町邦彦（教育長）、松野登（教育長職務代理者）、田中健一（教育委員）、伊藤憲春（教育委員）、嶋田敦子（教育委員）  
[事務局] 小林健司（総合政策部長）、栗原寛（教育部長）、大塚正也（総合政策部企画政策課長）、庄司康洋（教育部教育総務課長）、浅見孝男（教育部学務課長）、小瀬和彦（教育部指導課長）、矢ノ口美穂（教育部教育支援課長）、南彰彦（教育部学校給食課長）、五十嵐誠（教育部生涯学習推進センター長）、池田朋之（図書館長）、川崎淳子（統括指導主事）、森保亮（統括指導主事）、

議事日程 1. 新教育委員あいさつ  
2. 議題  
(1) 教育環境の整備について  
(2) 平成 31 年度の学校教育の主な取組について  
(3) いじめ・不登校等への取組について  
(4) 立川教育フォーラムについて  
3. その他

### 議事録

（清水市長）

こんにちは。大変遅くなって申しわけございません。

それでは、早速でございます、第 3 回の立川市総合教育会議を始めます。

#### 1. 新教育委員のあいさつ

（清水市長）

まず最初に、新たな教育委員さんからご挨拶を頂戴したいと思いますので、嶋田委員さん、よろしくお願いいたします。

（嶋田委員）

12 月 25 日に清水市長より辞令を頂戴いたしまして、新しく教育委員を務めさせていただくことになりました嶋田と申します。わからないことばかりでご迷惑をおかけすることと存じますが、立川市の子どもたちのために一つ一つ勉強させていただきながら尽力していきたいと考えておりますので、ご指導のほど、よろしくお願い申し上げます。

（清水市長）

ありがとうございました。

#### 2. 議題

(1) 教育環境の整備について

（清水市長）

それでは、早速ですが、議題に入ります。議題の第1であります。「教育環境の整備について」、ご報告は、庄司課長。

(教育総務課長)

それでは、教育総務課から、教育環境の整備について説明をいたします。

学校施設の老朽化への対応や、児童・生徒の安全・安心の観点から、特にこの5年間は市長部局と教育委員会の調整をしまして、結果的に、立川市としても大きな経費をかけて子どもたちのために教育環境を充実してまいりました。また現在進行形のものもありますし、また今後、取り組みを進めていかなければならないものもたくさんございます。

資料について説明をいたします。まず建替え工事につきましては、平成26年度に複合施設の一環として第一小学校の新校舎の建設がされました。また若葉台小学校の新校舎の建設、昨年4月に若葉台小学校として2校が統合されて、今現在、旧の若葉小学校のほうで子どもたちが学んでおりますけれども、今、旧けやき台小学校のほうに建設するところでございますが、今現在は旧けやき台小学校の校舎を解体したところでございます。今、もう更地になっているところでございますが、建設に向けて、今、最終調整ということで設計をしているところでございます。新校舎の建設工事につきましては今年7月ぐらいから着手をいたします。

また、全国的にあまり例のない保全計画に基づく大規模改修工事につきましては、再編個別計画等の影響もございまして、平成31年度に着手いたします第七小学校を最後に、これは終了となります。そのかわりと言っては何でございまして、学校施設の長寿命化という観点から、今までも行っています中規模改修、これを基本として、大規模改修から中規模改修レベルに落として施設の改修を行ってまいります。詳細につきましては、今後、関連部署と調整をしましてまいります。

個別の改修でございまして、トイレ改修につきましては、平成29年度から3年間で全校改修を進める予定でございまして。

特別教室への空調機設置、昨年、非常に暑いことがございまして、体調を崩した児童等も若干いたということでございまして、市としても、32年度までの計画を前倒しして、ちょうど昨年の12月議会で7校分の補正予算ということで、前倒しということでさせていただきました。そういったことで、今現在、進めていまして、今年の夏までには、なかなか、非常に台数が多いので、何とか夏休みには急いでやっていきたいという、今、そういった計画をしているところでございます。

残り、第七小学校は大規模改修の一環で、また第一中学校につきましては、別途、31年度予算で実施ができるよう、今、検討しているところでございます。あわせてトイレ改修をしていきたいというふうに考えているところでございます。

また、学校内の防犯カメラにつきましては、大きな事件がございまして、そのときに一斉に入れたんですが、大分老朽化しているところでございます。その後の入れかえを、現在、計画的に行っておりまして、今年度で小学校の入れかえが終了いたします。中学校につきましては今後入れかえを進めてまいります。

また、今後、体育館への空調機設置やLED照明への切りかえなど、新たな需要に対

する対応が必要になっております。これにつきましても検討をしてみたいと思いますが、財源に限りがございますので、関係部署と協議しながら、今後、計画的に進めてまいりたいと考えております。

説明は以上でございます。

(清水市長)

ただいまの説明につきまして、ご質問等がございましたらお願いをいたします。

田中委員。

(田中委員)

教育総務課長、ご説明ありがとうございました。

まず、教育環境の整備については、ほんとうにうれしい限りです。大きな予算が投じられたことに、清水市長さんをはじめ、関係庁内の方々に、この場を通してお礼の言葉を申し上げたいと思います。

今の説明にもございましたように、30年度は、この大規模改修工事が1校、トイレ改修工事が小・中学校あわせて6校、防犯カメラシステム改修工事が3校、さらに特別教室の空調機設置工事が3校、進めていただきました。ほんとうにありがたいことです。特に特別教室の空調機の設置工事は、平成31年度の前半までに、この6校に設置するための補正予算が認められたということは、学校というより地域、あるいは保護者の大きな喜びであると思います。

一方、このようなハード面だけでなく、英語教育の向上のためのALTの確保、あるいは児童の東京英語村体験、あと中学生の平和学習派遣事業等の、こういったソフト面にまで進めていただいたこと、ほんとうにうれしく思います。

その上で、平成31年度以降の教育環境の整備の予定としては、先ほど説明がございましたように、特別教室空調機設置工事が7校など、実に6件の整備が予定されている。改めて、厳しい予算の中で清水市長さんが一貫して教育の向上あるいは発展を重視しておられる、そのあらわれであると思いますし、重ねて感謝申し上げます。それと大事なことは、学校がなお一層、教育成果を上げることが重要となってまいります。

私のほうからは以上でございます。

(清水市長)

ありがとうございました。

ほかにございますか。松野委員。

(松野委員)

私も田中委員と重複いたしますが、とにかく学びの環境整備は、子どもたちにとって安全・安心な教育活動が展開できる、そういう場所づくりであるというふうに捉えております。先ほどの定例の委員会の中で、今後の中長期的な計画、あるいはシラバスの問題等、その改善の方向等を伺いましたので、これをぜひ保護者あるいは地域の皆さんにもお伝えしながら、安心できる教育環境づくりを継続するんだということを伝えていただきたいというふうに思っております。よろしく願いいたします。

(清水市長)

ほかにございますか。

特にないようでございますので、議題の1、教育環境の整備につきましては終了をいたしました。

## (2) 平成31年度の学校教育の主な取組について

(清水市長)

次に、議題の2であります「平成31年度の学校教育の主な取組について」、説明は指導課長。

(指導課長)

それでは、平成31年度の学校教育の主な取り組みについて、この時期でございますので、あくまでも案ということで説明をさせていただきます。

資料2をごらんください。上段のボックスです。平成31年度より、ネットワーク型学校経営システムの中核に全校でコミュニティ・スクールを実施してまいります。その上で、主要な施策の第1は学力向上でございます。習熟度程度に応じた施策を3点から展開してまいります。

第1点は、i、習熟の遅い層であるC・D層への施策です。本年度同様、地域未来塾の事業を活用し、全小・中学校において補修教室を実施いたします。また、習熟度別少人数指導のスタンダードである基本的指導課程を開発、活用してまいります。

第2点は、習熟の早い層であるA・B層への施策であります。本年度同様、小学校では地域未来塾事業を活用し、民間企業と連携して、小学校5年生を対象に発展的な学習教室を実施してまいります。中学校においては、東京都のスタディ・アシスト事業を活用し、中学校3年生の進学・進路指導教室を実施してまいります。

第3点は学びの基盤です。立川夢・未来ノートにより、夢や目標を達成するために学習すること、学ぶことであるという意識づけをし、学びに向かう意欲、態度を育成してまいります。

続きまして、主要な施策第2は豊かな心の育成です。主要7事業から実施してまいります。特に4「立川市民科の充実」をごらんください。この事業により、児童・生徒の意識がよりよく変化してございます。

グラフをごらんください。これは全国学力・学習状況調査の意識調査の結果でございます。「地域や社会をよくするために何をすべきかを考えたことがある」と回答した児童・生徒の割合が、立川市民科導入前の平成25年度と比較してみました。平成25年度と比較したところ、小学校では4.8ポイント、中学校では何と16.1ポイントも増加してございます。これは立川市民科の具体的な展開による結果であると捉えております。

主要な施策の第3は体力向上です。資料には掲載してございませんが、平成30年度、本年度、東京都の統一体力テストの結果においても、男子・女子ともに、小学校1年生から5年生、中学校3年生へと学年が上がるにつれ、運動能力が高まっております。小学校1年生では都平均を上回っているのは男女とも1項目だけですが、義務教育が終了する中学校3年生では、男子は8項目中7項目、女子は、女子が今回非常に頑張ったんですが、8項目中5項目で都の平均を上回っており、確実に体力の向上が図られつつございます。このことを踏まえ、2の幼保・小中連携を図った体育的活動の設定を実施し

てまいります。

先ほどの体力テストの結果において、小学校1年生、入学時の時点で都の平均を上回っている項目が1項目ということもあり、幼稚園、保育園、保育所との連携を強化して、12年間を見通した体育的活動を展開してまいります。

主要な施策の第4は特別支援教育の推進です。発達障害等の教育では、中学校特別支援教室「プラス」の巡回指導及び指導体制の整備を図ってまいります。知的障害教育では、都立特別支援学校と連携した専門性向上の事業を実施してまいります。理解教育の推進では、小・中学校校長会等での事例報告による理解啓発と交流及び共同学習のさらなる発展を図ってまいります。

説明は以上でございます。

(清水市長)

ただいまの報告につきまして、ご質問等がございましたらご発言願います。

田中委員。

(田中委員)

小瀬指導課長、ありがとうございます。ほんとうに素晴らしいですね。この31年度の「学校教育の主な取組(案)」ということで、夢と希望の持てる素晴らしい取り組みだと思います。改めて、この取り組みに当たって、コミュニティ・スクール全校導入ということをやりましたね。とりわけこの件については、清水市長さんはじめ全庁的な協力があって、しかもスピード感を持って、どうそれを実現していくか、どう生かしていくか、これが大事であると思います。地域に大きなプラスになるものと心から期待しているところでございます。

また、今年度まで、この教育施策を生かしながら、さらにこの新しい取り組みをされている小町教育長、小瀬指導課長、矢ノ口教育支援課長の思いがひしひしと伝わってまいります。

そこで、せっかくこんな素晴らしい取り組みを案としてお示ししていただいたので、より確かな施策となるため、何点か提言申し上げます。これについては特に回答は要りません。また事務局でご検討いただければということで、私の一方的な説明になるかと思えます。

まず1点目の学力向上、ほんとうに素晴らしいですね。この一、二年、驚異的な伸びで、ほんとうにうれしく思います。ただし課題がないかと言えばそうでもないもので、そのあたりをちょっと申し上げたいと思います。

まず、タブレット等のICT機器、これは全校に導入しているわけですが、もっと活用できるのではないかと、そんな思いを深くしております。例えば、習熟度C層・D層においても、このドリル学習を、タブレットで学習して基礎学力の定着を図ることはできないでしょうかということでございます。

次に、今度はⅡの豊かな心の育成についてでございます。これについては、道徳科の立川スタンダード、これを作成することはほんとうに素晴らしいことだと思うんですね。ほかでここまで考えているところは少ないのではないかと思います。その際に事業の中で、指導方法だけでなく、道徳科においては教材研究をどのように行ったらよいのか

と、それがちょっと現場ではわかりにくい、そういう先生方の声もお聞きします。したがって、ここでは立川スタンダードの中に、この教材研究の方法も入れてはどうでしょうか。そうするとそれぞれの学校が共通理解を図りながら向上できるのではないかと、そう思います。

あとⅢの体力向上です。これもほんとうにうれしいです。すばらしい成果が期待できるものと思っております。とりわけオリンピック・パラリンピック教育の充実、これについては、先ほど清水市長さんの肝いりで力を入れられている、子どものためにということではほんとうに熱意が伝わってまいります。これについては、2020年の子どもたちの参加として、見る競技に向けた取り組みや学校の対応、あるいは児童・生徒の指導、さらには保護者との連携・協力を計画的に進めてはいかがでしょうかということでございます。

あわせて、この中で子どもたち、幼・保・小の連携の中で、とりわけ幼・保から小学校に入ってくる児童が体力的に若干課題があるかなと思いますので、やはり幼・保・小の連携の中の体力向上について、具体的に何をどう進めたらいいのかという具体的なものをお示しいただくと、幼稚園あるいは保育園では1つの大きな力になるのではないかと、そんなふうには思っているところでございます。

次に、今度は最後になります、Ⅳです。特別支援教育の推進。これも例年、非常に充実が図られていることをうれしく思います。これについては、小学校は全校に特別支援教室「キラリ」、これが設置されてございます。今後、中学校も段階的に、全校に特別支援教室「プラス」、これを設置することになっているわけです。

そこで、今後、この拠点校を設置している学校だけでなく、市内全ての小・中学校全体で特別支援教育の充実を図っていったらどうでしょうかということでございます。通常の学級において、この特別支援教育の課程を踏まえた指導、これを充実させなければならぬわけですが、そのためには施策として、例えばですが、モデル校の設置や、あるいは事業リーダーの育成を進めてはどうでしょうか。

また、これの関係では、「理解教育の推進」の内容の中で、小・中学校での事例報告による理解啓発と、そういうふうに記載されてございますが、この中にインクルーシブ教育の推進を検討してはいかがでしょうか。

私のほうから何点か提言申し上げましたが、できましたら事務局のほうでご検討いただければありがたいなと思います。

以上でございます。

(清水市長)

まず指導課長から。

(指導課長)

非常に具体的なお提言をいただいたので、取り入れていきたいなと思っております。体力向上は、女子に課題があったのでございますが、今回、大きく伸びてきたなど。実は昨年度、立川就学前スタンダード20とあって、小学校に入るまでに育ててほしい、学び、遊びの視点とか、心の視点とか、それから体力、動きの視点、それを強く示してございます。昨年つくったんですけれども、今年度はまさに活用していく、具体的な項目にな

っておりますので、その辺をやっていききたいなと思っております。

あとは、非常に建設的なご提言をいただいたので、参考にさせていただきたいと思っております。

(松野委員)

私は、この取組表を見まして、今までの実績を踏まえて、さらに一步前へ進めようとする方策だなというふうに受けとめました。それは、例えば第1には、学力向上に習熟度を取り入れたり、それから学びの基盤には立川夢・未来ノート、こういったものを取り入れたりしています。体力向上では、体力調査をもとに、いわゆるPDCAサイクルによる授業の改善、これは既に中学校でも始めていますね。そして豊かな心の育成では、何とんでも市民科の9年間を見通したカリキュラム・マネジメント、そして特別支援では、中学校の支援教室「プラス」、これに向けて取り組む。私は、4つの項目の中で具体的な方策を出している、このことがやはり一步前へ進める要因、わかりやすい取り組みになるというふうに考えております。そういう意味では、実現可能な具体的な提案こそ、私は、この1年、期待できる教育活動になるのかなというふうに思っております。

そこで、質問ですが、学びの基盤の中の立川夢・未来ノート、これの意図だとか、あるいは活用の方法、これをどのようにお考えでしょうか、質問いたします。

(清水市長)

指導課長。

(指導課長)

実は立川夢・未来ノート、昨年6月なんですけれども、文科省が全国学力・学習状況調査の委託研究をしまして、お茶ノ水女子大の研究プロジェクトチームが、SES——SESというのは社会・経済的背景といいまして、1つは父親の学歴、もう一つは母親の学歴、そして3つ目に家庭の所得、その3つの3変数を構成した指標がSES、社会・経済的背景なんですけれども、当然、SES、社会・経済的背景が高いうちは高い学力が、低いSESのところはなかなか学力が厳しいという結果になったんですけれども、もう一つトピック的だったのは、SES、社会・経済的背景が低くても、夢とか目標に挑戦している児童・生徒、また家庭で進学とか、目標とか、そういうことを語り合っている家庭のお子さんは非常に高い学力の傾向があることが明らかになったということがございます。

立川も実は、学力希望調査で将来に夢や希望を持っていると回答した児童・生徒は、中3で、30年度を見ると43.5%で、5割に満たない。学力が、今、上がりつつありますので、それをしっかり、学ぶ態度、何のために学ぶのか、それを意識させるということが一番大きい背景に立川夢・未来ノートがございます。

以上でございます。

(清水市長)

松野委員。

(松野委員)

ありがとうございました。今回の指導要領の改訂の中でも、これはいいなと思っているのが学びに向かう力です。この考え方から子どもたちがこういうキャリア教育、職場

体験、いろいろな学びを通して夢をそれぞれに培っていき、そして学びそのものを人生や生活に生かしていき。未来ノートは、こういうものに大いに活用できる、期待できるというふうに考えているんですが、どうでしょうか、そういうものに役に立ちそうですか。

(清水市長)

指導課長。

(指導課長)

まさに松野委員がおっしゃっているところが狙いでございます。学力も、体力も、心の教育も、その原動力というのは、夢とか、目標とか、チャレンジしていく、そういう気持ちを育てていくというのは、まさにそのとおりだと思っております。

以上です。

(清水市長)

ありがとうございました。

ではほかにございますか。伊藤委員。

(伊藤委員)

ご説明ありがとうございます。私はむしろ感謝ということでお話を少しだけさせていただきたいと思うんですけれども、もともと、私、災害医療のほうでかなりずっといろいろなことをやってきた立場からいたしますと、中学生・小学生が防災、それから応急救護、普通救命講習というような形でしていただくのがほんとうにすばらしいことであろうと。いざ何かあったときに、大人の人よりも実際に動けるのが子どもたちであるということも、過去の例からすると事実でございます。それが、地域や社会をよくするために何をすべきか考えたことがあるという例えば中学生がこれだけ増えるということは、ほんとうにすばらしいこと、災害医療だけではなくて、地域のことを子どもたちが考えながら活動してくれるということに関しての、この表を見たときに、ほんとうにいい市だなというふうに考えます。

ですから、立川市民科の充実ということ、今までもですけれども、これからますますその市民科の充実ということを推し進めていただいて、何かあったときに立川を救うのは今の小・中学生であると、まあ、なければいいんですけれども、小・中学生であるというように考えて教育をしていくということはほんとうにすばらしいことであるなというように思います。感謝ということで述べさせていただきました。

(清水市長)

ありがとうございました。ほかにございますか。嶋田委員。

(嶋田委員)

大変いい案をつくっていただきましてありがとうございます。私からは意見というよりは感想のようなものになってしまいますけれども、1番の学力向上のところで、C・D層に対して、この層のお子さんだと塾にも行けないという家庭のお子さんも多くいらっしゃるかもしれないので、学校で丁寧に補修教室などをしていただけるというのは大変ありがたいことだなと思って見させていただきました。

それから、2番の豊かな心の育成のところ、立川市民科の充実ということですから、



ども、地域を知り、地域に愛着と誇りを持てる子どもの育成ということで、コミュニティ・スクールが始まりますので、地域に詳しい方がたくさんいらっしゃると思うので、そういった方にお力をおかりして、いろいろな勉強をさせていただくというのでもいいのかなと思いました。

以上でございます。

(清水市長)

指導課長、ありますか。指導課長。

(指導課長)

ありがとうございました。まさに先ほどの応急救護、普通救命講習、これもお認めいただいて、検定書をもって自信をやっぱり子どもってつけていく、1つのあらわれかなと。

それからコミュニティ・スクールが一番上にどんと載っておりますけれども、まさに、今、お話しのあった、特にC・D層の習熟度の遅い子どもたち、この子どもたちは、学校の先生もそうなんですけれども、地域で見たいこう、地域でその子の成長を見ていきましょうという形で、コミュニティ・スクールになることで、より一層、ネットワーク型学校経営で、地域とともに歩む学校という形になるのかなと思っています。そういう意味では、よくご理解いただきましてありがとうございます。

以上です。

(清水市長)

議題の2につきましては以上で終了といたします。

### (3) いじめ・不登校等への取組について

(清水市長)

次に、議題の3であります。「いじめ・不登校等への取組について」、事務局の指導課長からご報告をお願いします。

(指導課長)

それでは、平成31年度「いじめ・不登校等」への取り組みについて、こちらも案でございますが、ご説明をさせていただきます。お手元の資料3番になります。

まず、上段の左側のボックス、いじめ・不登校の最新の状況でございます。不登校では、平成29年度は小学校で65人、中学校162人と、特に小学校は年々増加してございます。中学校は横ばいではございますが、非常に多い。本市にとって喫緊の課題であると捉えてございます。

いじめでは、平成29年度は、小学校で955件、中学校で127件と、特に小学校では大きく増加しました。これは、ごく些細なからかいであっても、本人が心身に苦痛を感じれば、それはいじめであり、報告するとともに、迅速に対応するよう各学校へ指導したことによる結果だと考えてございます。

上段のボックスの一番右側のボックス、グラフを見ていただきたいんですが、平成29年度いじめの解消等の件数でございます。いじめ発生件数に対して、小・中学校ともに、解消件数と取り組み中の件数をあわせると100%になります。これは、各学校がいじめ

を見逃さず対応しているということがわかります。各小・中学校、非常にご努力いただいているかなと思っております。

では、次に解決に向けての取り組みですが、1件目は、I、いじめ・不登校等対応チームです。派遣型スクールソーシャルワーカー、指導主事、特命担当、常駐型スクールソーシャルワーカーからなるチームを編成し、毎月の報告書から不登校の実態、様子、欠席理由等、また不登校の度合い、それらを分析した上で解決の見通しを持ち、学校、児童・生徒、家庭の支援に当たってまいります。

中段のボックス、VからXIまでは関連諸機関であり、不登校・いじめの様態によって、解決に向けて必要な機関とケース会議を学校は開いております。

下段のボックスは、学級経営研修の実施、演劇表現を用いたコミュニケーション能力向上講座等々、いじめや不登校の、これは未然にそういうことを起こさせないという、未然防止策として向けた取り組みでございます。

説明は以上でございます。

(清水市長)

ただいまの説明につきまして、ご意見、ご質問等がございましたらお願いいたします。

田中委員。

(田中委員)

小瀬指導課長、ありがとうございました。ご提案の、この31年度のいじめ・不登校等への取り組みについて、ネットワーク型学校経営システム、これを基盤にしながら、これだけ、Iから何とXI、Iの指導課、いじめ・不登校等の対応チーム、あとは、XIは多摩立川保健所と、これだけ総合的な取り組みというのはほんとうに画期的だなと思えます。これによって今後の大きな成果が期待できるわけですが、その中で改めて、先ほどご報告がございましたように、いじめが、小学校の場合には、平成29年度955人と、かなり伸びているんですね。これは立川だけではなくして全国的にもものすごく伸びています。

これは何に起因するかというと、さっき課長のほうからも説明がございましたように、からかいなどのいじめがあったことがありますけれども、私としては、学校の認知力が上がったということが大きなものであり、同時に、両方の関係でしっかりいじめ対策がとられていない、そういうことが背景にあると私は読み取れます。

したがって、ここで質問として1点、あと提言として1点申し上げます。まず初めは質問でございます。このいじめ・不登校等対応チームの中心者は誰になりますか。例えば統括指導主事がリーダーとなって、各学校担当の指導主事、あるいはスクールソーシャルワーカーに指示を出すような組織の指揮命令系統、これを明確にしておかないと、これだけすばらしいプランを立てた中で、なかなか、機能的な部分もあるのではないかと。そこで、いじめ・不登校対応チームの指揮命令系統についてどうなっておりますか。1点、質問でございます。

あと次に提言でございます。これについては特に回答は要りませんが、私のほうから一言申し上げておきたいと思えます。この不登校についてお示しのよう、教育委員会からの指導はもちろん重要であると思えます。しかしながら、学校がアンテナを高くし

て、不登校児童・生徒との人間関係、これを密に取り合いながら、その関係を切らないようなシステムづくりが学校には求められるのではないかと思います。これだけ教育委員会が取り組んでいらっしゃるわけですから、学校としてはもっともっと、どうすればよろしいのか、対応ができるのか、このシステムづくりを学校内で取り組んではどうでしょうかという提言でございます。

以上でございます。

(清水市長)

指導課長。

(指導課長)

まず、よく見ていただきましてお礼申し上げます。ありがとうございます。

まずご質問のほうのところでございますが、当然、派遣型SSW、指導主事、特命担当、常駐型SSW、これを統括するのは統括指導主事でございます。それで、もちろんその統括指導主事に指示するのは指導課長でございます。

毎週、課題というものをやっております。その課題は、必要なときにはスクールソーシャルワーカーの指導主事、統括、指導課長が入って、1週間の中で一体どういふふうにやっていますかという、そういう話し合いをいたします。指示系統としては、課長、統括、このチームになってまいります。

それからもう一点は、実は各学校もアンテナを非常に高くしております。昨年度からちょっと無理なお願いをしまして、毎月の報告書では、不登校の児童・生徒の氏名だけではなくて、何日不登校で、わかればですけれども、なぜ不登校になったのか、それから、今、どういう機関とつながっているのかというのを一覧表にして、毎月、次の月の10日か15日までに提出するようになっております。これは実は非常に、言葉では簡単なんですけれども、各学校はそれを調べに家庭訪問をしたり、声かけしたりとか、そのたびに不登校とのかかわりができるわけなんですけれども、そういうふうな形で努力をしているところでございます。

以上です。

(清水市長)

よろしいですか。

ほかにございますか。松野委員。

(松野委員)

私、この表を見ながら、一番下段にある学級力の向上、それから立川スタンダード20のバージョン4ですね、コミュニケーション能力を基盤とした、このことがすごく重要というふうに思っております。というのは、今までいじめ防止対策推進法以降、学校だとか先生から、あるいはいじめ防止の指導、あるいは保護者に対しての啓発、いろいろなことが行われていたんですが、子ども自身がみずから行動を起こしたり、あるいはお互いに認め合ったり、そういう存在感をきちんと理解し合ったり、こういうことはなかなか見られなかった。またそういったことに対してもっと充実的に取り組んでいこうという動きがなかった。その点、この学級力の向上、コミュニケーション能力を基盤としたこの取り組みは、子どもたちの活動として、お互いを理解し、そしてお互いに信頼感を

高めたり、自己有用感を感じたり、このようなことができる活動と私は思っております。

ですから、この提案の中で、私はいい実践をもっともっと広げたり、紹介したり、そして立川の小・中学校がみんな学級力向上、コミュニケーション能力の向上を目指した活動を多様に展開できれば、私はかなりこの問題についても改善できるのではないかなというふうに思っている1人であります。

そのあたりについてはいかがでしょうか。今の現状やら、あるいはこの取り組み状況から課題となっていることなどありましたらお教えいただけるとありがたいです。

(清水市長)

指導課長。

(指導課長)

まさに学級カスタム、簡単に言いますと、子どもたちが自分でつけるんですけども、自分たちのクラスには頑張れる目標があるよ、ないよとか、友だちのよさを見つけていますか、見つけてくれないとか、そうやって評価していくわけなんですけれども、非常に熱心にやられている学校、でもまた学校の中でもクラスによって熱心にやってくれる先生、熱心にやってくれていない、傾向としては、熱心にやってくれている先生は、学級は安定しています。

松野委員がおっしゃるように、大分差がありまして、同じ学校の中でも、ちょっと低い、弱いなという学校は、やっぱり学級が不安定で、今後何をしていかなきゃいけないかといったら、1つ、校長先生方にはリーダーシップを発揮していただいて、各学校が共通して、これだけはやるんだというのをしっかりしていただく。それから、私ども教育委員会では、学校訪問等々を通して、その辺を徹底していく必要があるのかなと。だから、組織的に徹底していくということが重要かなと思っております。今後もそのように努力していきたいと思えます。

以上です。

(清水市長)

松野委員。

(松野委員)

ありがとうございます。子どもたちの力はそう簡単にはつかないだろうと思えますが、ただ、子どもたちが、ほんとうにこれは自分たち自身の問題だという当事者意識だとか、あるいは問題解決してきた解決力によって、みんなでこのことを解決していこうとする意識も芽生えてくる、高まっていくのではないかなというふうに思っています。この問題解決的な学習についてはいかがですか。もしお考えがありましたらお聞かせいただきたいのですが。

(清水市長)

指導課長。

(指導課長)

問題解決的な学習、まさにそれが立川スタンダード20でございますし、実は今度の副校長会で、立川市民科の問題解決的な学習のプロセス、探求的な学習のプロセスを紹介すると同時に説明いたしまして、その辺をさらに深めていきたいと考えているところで

す。

以上です。

(清水市長)

松野委員。

(松野委員)

ありがとうございます。そういう問題解決的な学習が展開されればされるほど、子どもたちの思考判断、表現力も伸びていけるし、またこういったいじめの問題についても、友だちとのつき合い方、つながり方、関係の持ち方をきっと学べるようになるると私も期待しているところであります。どうぞよろしく願いいたします。

(清水市長)

ありがとうございました。

ほかには。伊藤委員。

(伊藤委員)

ほんとうに細かなところまで手が届く取り組み、ありがとうございます。この中で、左の一番下のところにあります「絶対やめようネットいじめ」というリーフレットの作成・活用というふうにありますけれども、何かこれ以外にコメントがございましたら教えていただければと思います。いかがでしょう。

(清水市長)

指導課長。

(指導課長)

これ以外というとなかなか難しいんですけども、実は立川市独自で調査をいつも7月にしております。7月の調査の結果を分析いたしまして、どこに課題があるのか、それをもとに、今、ちょうどリーフレットができ上がりつつあるんですけども、年度内に配布して、年度末に子どもたちに指導するのと同時に、おうちに帰ったらお母さん、お父さんに説明するんだよと。それからもう一つ、年度明けてスタートのときにも、それを使って学校には周知をしていくという形で、より家庭を巻き込んだ形で展開したいと考えてございます。

(清水市長)

ありがとうございます。

後学のために教えておいてもらいたいんですけども、いじめの状況の統計の中で、先ほど田中委員からご質問があったんですが、私には理解がちょっと難しかったんですけども、この数字が1年前に比べて2倍以上に伸びていますね。19校でいくと約50件なんですね。2倍に伸びているということは、例えばこれが、各学校が同じように2倍に伸びているのか、あるいは学校ごとにばらつきがあるのか。

何でこんなことを聞くかという、今まではチェックの一定の指標があったわけでしょう。そのチェックの指標に沿ってきちんとやっていたか、あるいは、やらなかった学校とやった学校とがあるからばらばらになっていたのかとか、そこら辺が読めてくるような気がするんですが、この点についてはいかがでしょうか。

(指導課長)

実を言いますと、今まで若干ばらばら感が、学校によっていじめの認知力が甘い学校がございました。ただし今回、昨年・今年にかけて、ほぼ、どの学校も倍増しております。それはなぜかという、何年か前に文部科学省が、もう一度いじめのチェック、要するに学校はいじめではないと思っているけれども、本人はとてもしじめられたと感じていたこと、それが自殺につながったケースがあり、それを発見できないとはどういうことか。いじめというのはもっと子どもに寄り添って捉えるべきだという認識を文科省示しました。

(清水市長)

教育長。

(教育長)

そもそも今までは第三者的に見ていじめかどうかというのをジャッジしていたというのがございまして、それだと一人一人の子どもの心に寄り添うということではとてもずれが生じてしまっていて、極端な話、この程度はからかいで、いじめじゃないと先生がジャッジする場面が結構あったんですね。逆に言うと、子どもは大変心を痛めているわけで、不登校になったりしているわけです。そこをしっかりと文科省が見るべきだろうということで、各自治体に再調査しろとか、結構出したんですけども、立川市の場合そこを丁寧にすくおうということで、いじめの認知件数自体はたくさんで、大変ショッキングな数字なんですけれども、先ほどご説明したとおり、解消件数とか取り組み件数を足すと100%になっていますので、しっかりと、1件も見逃さない、そういう意味で、対応をしっかりと。

早期発見・早期対応という体制が立川市の場合はとれているのかなというふうに思いますので、まあ、数字はちょっと衝撃的な数字で、これはどんどん減らさなくちゃいけないということはあるんですけども、これをいかに解消させて、二度とこのようなことが起きないと。公教育でございまして、さまざまな子どもも混ざっておりますので、ある意味、社会の縮図でもあります。そこでしっかりそういった問題に対してどうやって向き合っているかということ学ぶことも子どもの成長にプラスになると思いますので、それを隠すのではなくて、それをクラスの仲間と共有して、しっかりそれを乗り越えること、そういう指導をしてまいりたいというふうに考えているところでございます。

(清水市長)

もう一回発言させていただきたいんですけども、子どもの世界だけでなく、そういうことは大人の世界にも当然あります。おしゃべりをしていても、相手の顔色を見ても、表情を見ても、この言動によって相手が嫌な気持ちになったな、嫌な感情を持っているなというのはなかなか推しはかれない場面があります。そういう中で、ほんとうはああ言われるのは嫌な気持ちになるんだよということを相手が持っているということを慮るばかりに、相手、例えば私のほうが相手との接触を薄くせざるを得ない、こういう課題が出てくると、逆に、大人ならまだいいんですが、子どものときにそういう価値観を植えてしまうと、接触が素に粗くなって、いわゆる感情の交流ができなくなってしまう可能性があると思うんです。

なぜこんなことをしつこく言うかということ、私も孫が5人おりまして、しょっちゅう

来て遊んでいくんですが、一人一人個性が違うんですね。何か言われようが、何をどう言われようが上の空で意に介さない子どもがいるかと思えば、ちょこっと叱っただけでしゅんとしてしまう子どももいる。そこら辺が人としての個性につながっていくんだらうと思うんですけども、私たち大人としては十分そこら辺をしんしゃくしながら、対子どもの接触で気を使っていかなければいけないのかな、あるいは子どもたちにそういうのを、体、心、気持ちの中へ取り込んで、相手を思いやる心はこうなんだよというのが自然に身につくような、そんな方向も大人の責任として考えていかなければいけないのかなと、日々、思っているところでございます。孫に教えられております。

それでは、この件につきましては終了といたします。

#### (4) 立川教育フォーラムについて

(清水市長)

次に4番目の議題でございます。立川教育フォーラムについて、指導課長、よろしくをお願いします。

(指導課長)

それでは、平成30年度立川教育フォーラムについてご説明をいたします。今年度は、平成31年2月16日土曜日、R I S U R Uホールで開催いたします。お手元の資料4をごらんください。上段のボックスに、立川教育フォーラムの目的とテーマ等を設定しています。本年度のテーマは、「主体的・対話的で深い学び」を支える「つながり」を生かした学校づくりです。講演は、大阪大学大学院、志水教授にお願いしてございます。

フォーラムの内容ですが、大きく6点ございます。第1点は、昨年度に引き続き、昨年度初めて行ったわけですが、職場体験協力事業者の方々に感謝の気持ちを込めて表彰させていただきたいと考えてございます。

第2点は、中学生による職場体験の報告でございます。

第3点は、立川市姉妹都市中学生サミット。今年のミッションは、立川のよさを英語でPRしようというものでした。生徒たちはすばらしい表現でミッションを達成することができました。

さらに今年度は、初の試みでございます平和学習、広島派遣報告を行います。生徒たちが原爆ドームや平和祈念館等の施設を見学したこと、実際に被災された方の体験談から生徒自身が感じたこと、考えたことを発表します。

第5点は、12月に実施された児童会・生徒会サミットを報告いたします。特に平成30年度は、SNSの使い方、2020東京オリンピック・パラリンピック大会に向けての各校の取り組みに加えまして、10年後の立川、理想的な立川はこうなってほしいなという立川について議論し合ったことと、そのために一体どういう手だてを講じたらいいたらうかというのが議題で話し合われました。非常に大きな提案が幾つかございました。

第6点は、立川市立科学教育センターの取組報告です。立川市では、ご案内のとおり、1964年から独自に科学教育センターを開設し、また2008年には希望者全入とし、今日に至るまで理科教育振興を図ってまいりました。本年度、平成30年度は過去最高の199人の応募がございました。年間16回の講座を計画し、科学への学びの場を開いてござい

ます。

また 11 月に開かれた宇宙エレベーターロボット競技会全国大会に出場し、国内 3 位となりました。実は本日、科学教育センター長である第八小学校校長、関口先生と岡村事務局長がお見えになってございます。自己紹介及びその様子を説明させていただきたいと考えてございます。よろしいでしょうか。

(清水市長)

はい。

(指導課長)

ではよろしく申し上げます。

(立川市立第八小学校校長・立川市立科学教育センター長)

立川市立第八小学校校長・立川市立科学教育センターのセンター長を務めております関口保司でございます。隣におりますのは事務局の岡村です。本日は、総合教育会議の中で立川の子どもたちが活躍した場面を直接ご報告できる機会を持たせていただきまして、大変にありがとうございます。感謝を申し上げます。

では報告をさせていただきます。

本立川市立科学教育センターの子どもたち、宇宙エレベーターロボット競技会というのがありまして、そこで立川の八小チームが全国大会に出場いたしました。その結果、全国で第 3 位という快挙を得ることができました。

この宇宙エレベーターというものなのですが、これは、地球から約 3 万 6,000 キロメートルの高さにある静止衛星まで人や物を運ぶ夢の乗り物として、今、研究がされております。時速 200 キロで昇降し、大体 1 週間ぐらいかけて、この上の宇宙ステーションに、安全に誰でもたどり着けるとい、これが宇宙エレベーターです。

この宇宙エレベーターロボット競技会というのは、この宇宙エレベーターをやるのは次の子どもたちの世代であると。ですから、子どもたちに、この宇宙エレベーターについて学び、そしていろいろなレゴブロックを使って作成したロボット、こちらに置いていますが、こういうロボットをつくりまして、そしてこのシステムをぜひ学んでほしいということで始まりました。

高さ 5 メートルの場所まで、このロボットが上がっています。そして、その 5 メートルのところにある宇宙ステーションに、今はピンポン玉を運ぶと、そういうふうなことの正確さと速さを競う、そういうレースになっております。

この宇宙エレベーターロボット競技会を通しまして、子どもたちは考える力、そして物をつくる、こういう物づくりの力、さらには発見する力、そして、小学校から高校までおりますし、今回も実は OB チームが参加したり、科学センターで OB が教えてくれたりと、そういうこともありまして、交流する力、それらをつけているところです。

今回、宇宙エレベーターロボット競技会は文部科学省の後援をいただきました。小学校から高校まで一貫してプログラミングの基礎を学べる、そういう大会になっています。

全国大会は、昨年、2018 年 11 月 11 日の日曜日、神奈川大学の横浜キャンパスで行われました。この前に実は予選会がありまして、多摩地区の予選会には、多摩地域の小学校のチーム 32 チームが出ております。この中で、実は立川からも 8 チーム、小学生は出



ております。その中で全国大会に選ばれて、この全国大会に出場ができたということになっています。またOBチームも全国大会には出場いたしました。

それでは、これから立川の子どもたち、八小の2名ですけれども、全国3位になった、そのときの様子について見ていただければと思います。

(ビデオ上映開始)

こうやってだんだん上に上がっていきます。高さ5メートルです。

ずっと上がって行って、ステーションのところに近づいてくっつくとピンポン玉が落ちるというプログラムが組まれています。

5分間の間に玉が何回上がったりおりたりするか、そしてできるだけたくさんのもを上に運ぶという形になっています。

(ビデオ上映終了)

こういう競技会をさせていただきました。

立川の子どもたち、これからも頑張って、我々科学センターで指導していきながら力をつけていきたいというふうに思っています。

報告の機会をいただきまして大変どうもありがとうございました。(拍手)

(指導課長)

報告は以上でございます。

(清水市長)

この件につきまして、ご発言はございますでしょうか。田中委員。

(田中委員)

関口校長先生、ほんとうにありがとうございました。科学教育センターのセンター長としての特別な取り組み、あと先ほど先生がおっしゃいました、考える力、物をつくる力、発見する力、交流する力、この4つの力を見事に、この宇宙エレベーターロボット、これに集約しているなど、先生の熱意を非常に実感しました。これから小さな科学者がどんどん誕生することを心から楽しみにしております。ほんとうに貴重なご報告、ありがとうございました。

以上でございます。

(清水市長)

ご苦労さまでした。ありがとうございました。

ほかにご発言の方はいらっしゃいますか。じゃあ、教育長。

(教育長)

次の教育フォーラムで、子どもたちが今日の内容を子どもたち自身のプレゼンで会場に向けて発表していただけるのは大変楽しみだなと思っています。特に、理科離れという言葉がございまして、日本は人材が宝だということでございますので、しっかりその技術、科学に関しましても、ノーベル賞を含めまして、今まで諸先輩方が培ってきたベースがあるわけでございます。それを今の小・中学生がしっかりと引き継ぐという意味でも科学センターの役割は大変に大きいのかなというふうに思っています。

小学校のうちはまだ理科は好きという子どもが多いんですけれども、中学生になると、この理科が途端に嫌いな科目になってしまうという調査結果もありますので、来年度に

向けまして、中学生の科学センターというのも計画しているところでございます。そんな取り組みも含めまして、立川市におきましては、市長のご意見で、希望者は全員入れたほうが良いということで、それにしっかりとお応えさせていただきまして、もう施設的にはばんばんの199名ということで、まあ、2部制でやっているんですけども、うれしい悲鳴で、立川市の場合は科学センターを活用しております。

他市に聞くと、なかなか人が集まらないとか、科学センターの希望者が少ないとか、そんな話を聞いたことがございますけれども、本市の場合は、そういった意味で言うと、科学センターを含めて、これらの取り組みに関しまして、市長部局ともども手を携えてやってきた成果がここにあらわれて、その宇宙エレベーターに関しましても、プログラミング教育に結びつくということで、次期の学習指導要領でも必修になっておりますので、そんなことにもつながる、とても楽しい取り組みになったのかなというふうに思っております。

この内容を含めまして、子どもが教育の成果であるというふうに思っていますので、子どもたちが、職場体験にしろ、サミットの報告にしろ、子どもたち自身のプレゼンで報告してもらおうというのが立川教育フォーラムのまさに目玉でございます。それをぜひ多くの市民に見ていただいて、これからの立川市の教育について大いに語り合っただけならばというふうに考えています。

以上でございます。

(清水市長)

ありがとうございました。

それでは、これもちまして、議題の4は終了とさせていただきます。

### 3. その他

(清水市長)

次に、その他という項目でございますが、企画政策課長から報告がございます。

(企画政策課長)

本日は、この議事録の関係でご説明をさせていただきます。本日の議事録につきましては、作成をいたしまして、皆様にご発言等のご確認をお願いしたいと思いますので、よろしくお願いたします。確認後に、市ホームページや、市役所3階の市政情報コーナーにて公開をしております。

また、今回の総合教育会議の開催につきましては、4月以降に開催を予定しております。日程調整をさせていただきますとお知らせいたしますので、よろしくお願いたします。

それから最後に1点ご報告をさせていただきます。お手元に、今、この広報の原稿がございます。こちらについてご説明をさせていただければと思います。前回の総合教育会議でご協議いただきました携帯電話等の依存について、市長から、社会全体の問題であり、市全体で取り組むべきということでご発言がございました。それを受けまして、市では1月25日に発行いたします広報紙の1ページを使いまして、スマートフォンの利用に係る問題について掲載をする予定で、今、作業を進めております。

なお、この内容につきましては、これから修正が入ってきますので、最終形ではございませんが、参考として見ていただければと思います。取り扱いについては、変更が加わりますので、ご注意くださいようお願いいたします。

以上でございます。よろしくお願いいたします。

(清水市長)

ただいまのことにつきまして、ご質問、ご意見がございましたら発言を願いたいと思いますが。田中委員。

(田中委員)

ほんとうに丁寧な対応をありがとうございました。1点だけ、もし可能であればということなのですが、依存がある、そういう場合は専門家に相談することも必要ではないかと考えていますので、相談する機関を、ある程度、検討・吟味しながら、場合によっては掲載してあげること必要である。ある意味では、実際、子どもがスマホに対する依存度が高い場合に保護者がどう対応すべきか、そういう相談先がある程度明示されるといいなと思います。一応提言でございます。

(清水市長)

課長から意見はありますか。

(企画政策課長)

今、編集している最中ですので、その辺のところを伝えて、可能であれば入れていけるように伝えていきたいと思います。ありがとうございます。

(清水市長)

田中委員、よろしいですか。

(田中委員)

はい。

(清水市長)

ほかにご発言ございますか。

ないようでございますので、本日の議題は全て終了いたしました。これをもちまして、平成30年度第3回立川市総合教育会議を閉会させていただきます。どうもお疲れさまでした。ありがとうございました。